



左：煙麻石…縞模様が特徴
右上：金鳳石…きめが細かい
右下：鳳鳴石…粒が荒い



硬質チップ付きノミ



ゴリッ、ゴリッと音を刻む



砥石の磨きでノミ跡が消える



「清林堂」四代目ご主人の
足木勇さん

硯職人というお仕事をどのように捉えてみますか？
足木 珍しい仕事だからテレビなどの取材もあるけれど、別に大した職業とは思っていません。お茶碗と同じように美学的なモノツクリと感じ



ガラス張りの作業場

足木 二十二歳から修行が始まりました。はじめの一年はひたすら硯の裏を平らにする作業を繰り返しました。ノミの柄を肩甲骨の下辺りで押しながら、硯を動かして彫りますが、一日中この作業を行うと皮膚が破れてきます。でも、それをキツイと思ったりはしませんでした。

硯を彫る作業の流れはどのような手順ですか？
足木 鳳来寺山へ入り、自分で石を採ってきます。前回採りに入ったのは五年前です。以前に比べれば採れなくなりましただけで、硯を彫る数も減ってしまったので。まず、採ってきた石の表情を見て、硯の厚さに「割り」ます。堆積岩の層に沿って板状に割るといいことです。次は「削り」です。硯の底の裏面が平ら

『石の表情』とはどういうものなのでしょうか？
足木 石は天然のもので、色々な異物やムラがあります。だからバランスを良くするために、どこかを削り去って硯の形を整えます。「削り」の時、ヒビがある石は叩くとボクボクという音がします。

でなければ、墨を磨る時にガタガタして収まりが悪いので、自分の感覚を頼りに削ります。そして「彫り」になります。鉛筆で削る縁を線引きして、6種類のノミで削ります。刃先は堅いのですが、それでも磨り減りが速く、父親の代までは刃先を造る鍛冶もしていました。今は岡崎の石屋用の硬質のチップを用いています。最後に「仕上げ」で砥石と紙ヤスリで磨き、漆を塗ります。一連の作業を一ヶ月で二十個ほどのペースで製作しています。



表参道からみた清林堂の外観。右手前はガラス張りの作業場で作業風景がみられる。

自然の石を扱う足木さん。お話しは優しく取りのない自然体の空気がありました。『硯や五平餅を売ったりして、表参道の家々が普通に生活している営みに戻って欲しい』という願いを抱かれています。鳳来寺山を訪れた際には、皆さんも気軽にお店に立ち寄って、硯の世界に触れてみてください。

自然に彫る硯



硯製造販売
「清林堂」 足木 勇
〒441-1944
新城市門谷字上浦 26-1
電話：0536-35-1151

訪問者：宮内一郎(山村振興課)
訪問日：平成23年10月7日



写真左上：鳳来寺山の特産品である硯 写真左下：清林堂の店内
写真右：清林堂の法被を着て、ノミで硯の削り作業をする足木さん

鳳来寺山の開山から千三百年。ここを訪れた観光客のお土産品として硯は好評でした。中央構造線という断層が走っているこの地域では、金鳳石・煙麻石・鳳鳴石という三種の硯に適した石が採れ、最盛期には7〜8軒の硯屋さんが表参道に並んでいました。
現在は二軒の硯屋さんが、昔ながらの手彫りにこだわり、硯を作り続けています。その内の一軒である「清林堂」の四代目ご主人である足木さんにお会いしてきました。
丁度、筆者がお邪魔した時、田原から来られた年配の男性のお客さんがみえました。十年前に清林堂で購入した硯に墨のカスが付着して溜まったので、綺麗に磨いてもらいにみえたそうです(墨に含まれるニカワが硯の表面をガラスのようにツルツルに変え、それにより墨が滑り、濃く磨れなくなる)。男性は仕事を定年後、初めは遊びで子供の筆を持ってみました。書き始めて字を知らない自分に気付かれたそうです。今は写経に励む日々を送ってみえ、筆を持つて書くことが面白い様子。待つこと十分程で、足木さんの技により、硯は購入した当時のような美しい表面へ生まれ変わりました。男性はそ

昔購入した硯を、再び綺麗にしてみようため、こられるお客さんがいるのですね。
足木 以前に自分が彫った硯はみるとやっぱり分かります。硯は何年でもずっと使い続けることができるのですから、あのように大事に使ってもらえる方がみえることは嬉しいです。最近の子供が使う習字セットは、硯がセラミックやプラスチック、松の煤をニカワで固めた墨ではなくて、墨汁が一般的です。硯を使う人が減り、鳳来寺山を訪れる人も減って、硯屋だけでは生計を立てることが難しくなりましたので、子供に清林堂の跡を継いでもらう予定もありませんね。
硯を彫ることは、先代のお父さんから学ばれたのですか？



磨きあげられた愛用の硯
使い慣れた馴染みの楽しさが詰まっている

れを満面の笑みでしげしげと眺め、深々とお辞儀をされて帰っていかれました。